様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成2 1 年4 月1 日現在

研究種目：基盤研究（S）
研究期間：２００４～２００８
課題番号：１６１０２００１
研究課題名（和文）　チベット文化圏における言語基層の解明

研究課題名（英文）　Linguistic Substratum in Tibet

研究代表者
長野　泰彦（NAGANO　YASUHIKO）
国立民族学博物館・民族文化研究部・教授
研究者番号：５０１４２０１３

研究成果の概要：チベット・ビルマ語族は、中国・青海省からパキスタン東北部にわたる広い地域に分布する。この語族の歴史はその大枠がようやく明らかになってきたものの、未解読文献言語や記述のない言語が多数残っている。本計画は①未記述言語の調査、②未解読古文献(シャンシュン語)の解読、③チベット語圏の言語基層動態解明、を目標として研究を行い、幾つかの知られていなかった言語を発見して記述、新シャンシュン語(14 世紀)語彙集集成、古シャンシュン語の文法的特徴の抽出、に成功しただけでなく、歴史言語学方法論に接触・基層という視点を導入することの意義に関して提言を行うことができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2004 年度	16,300,000	4,890,000	21,190,000
2005 年度	12,300,000	3,690,000	15,990,000
2006 年度	13,900,000	4,170,000	18,070,000
2007 年度	11,900,000	3,570,000	15,470,000
2008 年度	14,700,000	4,410,000	19,110,000
総　計	69,100,000	20,730,000	89,830,000

研究分野：チベット・ビルマ歴史言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：ギャロン、チベット・ビルマ諸語、シャンシュン語、言語基層

１．研究開始当初の背景

チベット・ビルマ語族は、中国・青海省、四川省、雲南省、チベット自治区、ヒマラヤ地域、インド東北部と西北部、パキスタン東北部にわたる広い地域に分布する大言語グループであり、それら諸言語の共時的・通時的研究はこの 80 年間に長足の進歩を遂げた。しかし、それは主要な言語の分析に基づいた系統関係の大枠が示された段階であり、未だ解読されていない文献言語や記述のなされていない言語が多数残っている。この語族の中で最も古い文献資料を有するチベット語・チベット文化圏ひとつを取ってみても、そこは決してチベット語によって覆われていたのではなく、多様な基層言語が後にチベット文語の基礎となる自然言語と接触するプロセスを経たはずである。

本研究はこの言語動態を河西九曲の地（四川省西北部）・チベット西部・及びヒマラヤ地域での未記述言語のフィールドワークによって的確に把握し、チベット言語圏における言語基層のあり方を解明するとともに、その脈絡において未解読言語のひとつであるシャンシュン語の再構成を行う。

２．研究の目的

(1)チベット・ビルマ系未記述言語の調査研究とデータベース作成

チベット文語の基礎となる自然言語(pre-Tibetan)に基層言語として接触したと考えられる、川西走廊の地（四川省西北部)、チベット西部、及びヒマラヤ地域の言語、特に、木雅語、嘉絨語、羌語、ガルワールヒマール諸語、の形態統辞論を中心とした記述研究を行い、カリフォルニア大学 STEDT プロジェクトとの連携の下に文法データベースを作成する。

(2)Pre-Tibetan の再構成とチベット語文語成立過程の研究

基層言語と文語チベット語との比較を通じて、基層言語が文語文法に及ぼした影響を探り、自然言語としての Pre-Tibetan の語彙形式と文法を再構する。同時にチベット語文語がいかにして人工的に整備されたのかを跡付ける。

(3)シャンシュン語文献の解読と文法の再構成

チベットに仏教が齎される以前にドミナントであったポン教徒の言語、シャンシュン語を、文献研究と統計数理学の立場から総合的に解析し、解読を目指す。

1999-2001 年度に行った統辞解析で得られた成果を、統計数理研究所で開発されたプログラムを用いてさらに精密化し、同言語の文法の概略を明らかにする。

(4)上記の具体的な言語現象を基礎として、歴史言語学の方法としての「比較」に「基層・接触」の視点を導入することがどの程度有効であるのかという方法論的観点からの検討を行う。

３．研究の方法

(1)チベット・ビルマ系未記述諸語の調査研究は、主として中国四川省西部とインド北部(ガルワールヒマール地方)で現地調査を継続的に行い、目標としていた程度の精密度で記述を完了しただけでなく、幾つかの従前知られていなかった言語(方言)を発見することができた。

(2)チベット語文語形成過程については、木簡文書の分析を継続的に行い、Pre-Tibetan の姿をある程度まで再構できた。また、伝統的チベット語文法学の解析は現在進行中である。

(3)シャンシュン語文献の解読はふたつのアプローチを平行させた。ひとつは敦煌出土チベット文献に含まれる非チベット語文献を特定し、そのうちの 6 種が同一の言語を表記したものと判断。幾つかの傍証からそれが古シャンシュン語であるとの結論を得た。それらについて統計数理的手法を援用しつつ分析した結果、数点の文法的特徴を抽出した。語彙については未だ判然としない点が多く、パラレルテキストの探索を併せて継続中である。

シャンシュン語のもう一つの層である新シャンシュン語(14 世紀以降)については、現存するポン教文献 16 種からシャンシュン語に来源を持つと考えられる語彙を抜き出し、ポン教学僧との共同研究を経て、チベット語語釈と英訳を付した辞書を作成し、公刊した。

(4)歴史言語学の方法としての「比較」に「基層・接触」の視点を導入することがどの程度有効であるのかという方法論的観点からの検討は最終年度に国際シンポジウムを開催し、議論を深めることとし、2008 年 9 月にそれを行った。

４．研究成果

(1)チベット・ビルマ系未記述言語の調査の成果については、「5.主な発表論文等」に記す［雑誌論文］により、発表した。また、［図書］Nagano & Prins 2009 はギャロン語ツェンラ方言の世界初の語彙集である。

(2) Pre-Tibetan の再構成とチベット語文語成立過程については、Takeuchi 2009/2007/2004 参照。

(3) シャンシュン語文献の解読と文法の再構成については、2 つのアプローチを平行させて行い、それぞれに成果を挙げた。

①古シャンシュン語(9 世紀)を記す 6 種の敦煌出土文献をデータ化し、統計数理学的手法も援用しつつ、解読作業を行い、幾つかの文法的特徴を抽出した。この成果は［図書］Nagano 2009(印刷中)に詳しい。

②新シャンシュン語(14 世紀)については、現存する 16 種のポン教典籍からシャンシュン語を抜き出す研究をポン教学僧とともに行い、チベット語語釈と英訳を付した語彙集を刊行した。⇒［図書］Nagano & Karmay 2008.

(4) シャンシュン語の歴史的位置づけと、歴史言語学の方法としての「比較」に「基層・接触」の視点を導入することがどの程度有効であるのかという方法論的観点からの検討は 2008 年 9 月に開催した国際研究集会 Linguistic Substrata in Tibeto-Burman Area において議論された。第 1/2 セッションがシャンシュン語の歴史的位置づけに関す

るもの、第3/4セッションが歴史言語学方法論に関するものである。そこでの発表タイトルは以下の通りである。

Pronominals and Directives

-Directional prefixes in nDrapa and neighboring languages: An areal feature of Western Sichuan (S. Shirai)
-Verbal affixes in West Himalayan(Y. Takahashi)
-On the rise of the numeral classifier system in Newar (K. Kiryu)
-Origin of non-Tibetan words in Tibetan dialects of the Ethnic Corridor in West Sichuan (H. Suzuki)

Zhangzhung and Old Tibetan

-Some notes on 'gold' and 'road' in Zhangzhung and Tamangic (I. Honda)
-Zhang-zhung and Qiangic languages (G. Jacques)
-Zhangzhung and Gyarong (Y. Nagano)
-Present stage of deciphering Old Zhangzhung (T. Takeuchi & A. Nishida)
-Formation and transformation of Old Tibetan (T. Takeuchi)

Comparison, Typology and Sub-grouping

-When the 'majority rule' does not apply: Ergative to accusative drift in Austronesian languages and how we know (R. Kikusawa)
-Challenging the status-quo: Drift, direct inheritance and reconstruction (L. Reid)
-Is there a Himalayan tone typology? (J. Evans)
-Shared morphology in Qiang and Tibetan (Huang Chenglong)

Some Critical Eyes on Linguistic Substrata

-Causes and effects of substratum and superstratum influence, with reference to Tibeto-Burman languages (R. LaPolla)
-Historical development of Youle Jino and linguistic substratum of Tibeto-Burman (N. Hayashi)
-Application of substrate theory in the research of ethnic languages in China (Dai Qingxia)
-Stable roots in Sino-Tibetan/Tibeto-Burman (J. Matisoff)
-How (not) to establish substratum interference (S. Thomason)

具体的な言語現象を基礎として、歴史言語学の方法としての「比較」に「基層・接触」の視点を導入することが有効であることが確認されたが、チベット・ビルマ諸語の場合、「基層」を仮設できる下位言語群とそうでない言語群があり、「drift」なども勘案しつつ、この点をより慎重に扱うべきであるとの結論に達した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　47　件）

【2009】

1. T. Takeuchi Old Tibetan Buddhist texts from post-Tibetan Empire period. *Old Tibetan Studies* 2. Leiden:Brill , 査読有,2009年9月発行予定(印刷中)
2. T. Takeuchi *Tshar, srang*, and *tshan*: Administrative units in Tibetan ruled Khotan. *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 3 ,査読有,2009年12月発行予定(印刷中)
3. T. Ikeda 「羌語支語言的特徴詞：試探西夏語和羌語支的關係」 『日本東方學』北京：中華書局 ,査読有,2009年12月発行予定(印刷中)
4. T. Ikeda Verbs of Existence in Tangut and Mu-nya. *Mediaeval Tibeto-Burman Languages* III, Leiden:Brill, 査読有,2009年10月発行予定(印刷中)
5. S. Shirai Effects of Animacy on Existential Sentences in nDrapa.『言語研究』査読有,134:pp.1-22,2009

【2008】

6. Y. Nagano: A preliminary note to the Gyarong color terms. *Revue d'Études Tibétaines* 14: 99-106 , 査読有, 2008
7. T. Ikeda 200 Example Sentences in the Mu-nya language. *ZINBUN* No.40 , 査読有, 2008
8. 池田巧「フランス國立圖書館所藏のナム語文獻」『敦煌寫本研究年報』第二號. 京都大學人文科學研究所, 165-175 頁, 査読有, 2008
9. K. Kiryu EAT expressions in Kathmandu Newar. 美作大学短期大学部紀要41(53):1-9 , 査読無, 2008

【2007】

10. 武内紹人「チベット語文書」『ハラホト出土モンゴル文書の研究』pp.200-209. 京都：雄山閣, 査読有, 2007
11. 池田巧「《西番譯語》に記録されたリュズ語」福盛貴弘ほか編『華夷訳語論文集』13, 大東文化大学, 95-106 頁,査読有, 2007

12. 白井聡子「ダパ語における「視点」を示す二系列の助動詞」『京都大学文学部紀要』第 46 号, pp. 267-341,査読有, 2007
13. S. Shirai Evidentials and evidential-like categories in nDrapa. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 30(2):125-150,査読有, 2007
14. Y. Takahashi On the deictic patterns in Kinnaur. *Linguistics of the Himalayas and Beyond* pp.341- 354,査読有, 2007
15. I. Honda A comparative and historical study of demonstratives and plural markers in Tamangic languages. *Linguistics of the Himalayas and Beyond* pp. 97-118,査読有, 2007
16. 桐生和幸 「メチェ語の接辞-CHəI の機能」『神戸言語学論叢』5:79-91,査読有, 2007
17. R. Kikusawa Proto who utilized turmeric, and how?. *Language Description, History and Development Linguistic Indulgence in memory of Terry Crowley.* pp. 341-354,査読有, 2007

【2006】
18. T. Ikeda Exploring the Mu-nya people and their language. *ZINBUN* No.39 pp.19- 147,査読有, 2006
19. 白井聡子 「ダパ語メト方言における音素体系と子音連続の相関」『東ユーラシア言語研究 第 1 集』pp.307-323, 東京：好文出版,査読有, 2006
20. S. Shirai The two structures of the noun-modification in Modern Tibetan.『漢藏語言研究―第三十四届国際漢藏語言暨語言學会議論文集』pp.506-514. 北京：民族出版社,査読有, 2006
21. S. Shirai Analysis of multiple existential sentences in nDrapa, 『ユーラシア諸言語の研究』pp. 145-173. 京都：「庄垣内正弘先生退任記念論集 ユーラシア諸言語の研究」刊行会,査読無, 2006
22. 白井聡子 「ダパ語メト方言」中山俊秀ほか編『文法を描く―フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ― 1』pp. 119-148, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所,査読有, 2006

【2005】
23. 長野泰彦「ギャロン語の否定辞」『国立民族学博物館研究報告』29(3)：357-374, 査読有, 2005
24. R. Kikusawa Comparative linguistics: a bridge that connects us to languages and people of the past. *Language in Hawai'i and the Pacific* pp.415- 433, 査読有, 2005

【2004】
25. Y. Nagano Cogtse Gyarong. *The Sino-Tibetan Languages*, pp. 469-489. London:Routledge,査読有, 2004
26. R. Kikusawa Word categories in Fijian. *Asian and African Languages and Linguistics* 32: pp.1-16,査読有, 2004
27. 武内紹人「中央アジア出土チベット語木簡-その特徴と再利用-」『木簡』26 :pp.259-283,査読有, 2004
28. T. Takeuchi The Tibetan military system and its activities from Khotan and Lob-nor. In *The Silk Road: Trade, Travel, War and Faith*, pp. 50-56. London:British Library,査読有, 2004
29. T. Takeuchi Sociolinguistic Implications of the use of Tibetan in East Turkestan from the end of Tibetan Domination through the Tangut Period (9th-12th c.). In *Turfan Revisited*, pp. 341-348. Berlin: Dietrich Reimer Verlag,査読有, 2004
30. T. Ikeda The Mu-nya language and the Tangut language: Some problems in their comparison. *Studies on Sino-Tibetan Languages.* pp. 383- 402. Taipei: Academia Sinica ,査読有, 2004
31. 白井聡子 「ダパ語の助動詞について」『京都大学言語学研究』23:217,査読有, 2004

〔学会発表〕(過去 2 年間の主要なもののみ記載)(計 18 件)

【2008】
1. I. Honda Clause chaining with a reduplicated verb in Kaike. *Himalayan Languages Symposium.* The 12th Conference, スウェーデン イェーテボリ大学,2008 年 8 月
2. I. Honda The Kaike conjunct/disjunct revisited. 41 回国際シナ・チベット言語学会、英国・ロンドン大学、2008 年 9 月
3. T. Ikeda Verbs of Existence in Tangut and Mu-nya 41 回国際シナ・チベット言語学会、英国・ロンドン大学、2008 年 9 月
4. S. Shirai Auxiliary Verb in nDrapa. Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium Bangkok、タイ チュラロンコン大学,2008 年 5 月
5. S. Shirai Telicity and directional

prefixes in nDrapa. The Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan. 台湾 アカデミアシニカ 2008年11月
6. S. Shirai Existential verbs in verb serializations in nDrapa. 41 回国際シナ・チベット言語学会、英国・ロンドン大学、2008年9月

【2007】
7. T. Takeuchi［招待講演］The Impact of the finds at Dunhuang on Tibetan Studies. 英国学士院、2007年7月
8. T. Ikeda 「羌語支語言的特徴詞：試探西夏語和羌語支的關係」 40 回国際シナ・チベット言語学会，中国ハルピン市 Heilongjiang University 2007年7月
9. 白井聡子 「ダパ語の方向接辞」日本言語学会第 135 回大会、信州大学、2007 年 11 月

〔図書〕（計9件）

【2009】
1. Y. Nagano (ed) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics.* Senri Ethnological Studies No. 75、320ps、2009
2. Y. Nagano & M. Prins (eds) *A Lexicon of rGyalrong bTsanlha Dialect.* 国立民族学博物館調査報告 No.79、743ps、2009

【2008】
3. Y. Nagano & S. Karmay (eds) *A Lexicon of Zhangzhung and Bonpo Terms.* 国立民族学博物館調査報告 No.76、323ps、2008

【2007】
4. T. Takeuchi & Y. Imaeda (eds) *Tibetan Documents from Dunhuang kept at the Bibliothèque Nationale de France and the British Library*, Old Tibetan Documents Online Monograph Series Vol. I. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies. 358 ps. 2007

【2006】
5. 白井聡子・庄垣内正弘(編) 『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』京都大学文学部、260ps、2006

【2005】
6. 池田巧他4名(共著)『21世紀後半の言語はどうなるのか 情報化・国際化のなかの言語』東京：明石書店、260ps、2005

〔その他〕
○紙媒体及びHPによる研究成果公表
本研究の成果はこの報告書や4. 研究成果(1)(2)(3)の他、3 冊の書籍としても公表する。
その第 1 巻は 4. 研究成果(4)に掲げる国際研究集会の成果報告で、5.主な発表論文など［図書］ Y. Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics.* Senri Ethnological Studies No. 75 国立民族学博物館、である。同館から入手できるだけでなく、2009 年 9 月以降同館のホームページを通じて内容を閲覧できる。URL は http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/16102001.html である。
第 2 巻はチベット語形成とその基層を探求する上で必須のチベット語諸方言の基礎語彙集成であり、多くは従前記述がなかったものである。第3巻は2008年9月の国際研究集会の成果報告には含まれないが、本科学研究費で行われた現地調査の結果と、シャンシュン語研究に資するポン教の基礎的儀礼テキストであり、いずれも今まで報告の無かったものを収録してある。第 2・3 巻は既に同館のホームページに公開済みである。URL は上記と同じ。

○新聞掲載情報
1. 長野泰彦、武内紹人『シャンシュン語 チベットの未解読言語 民博などで解析作業』読売新聞(夕刊)2008年8月19日(火)掲載

６．研究組織
(1)研究代表者
長野 泰彦（NAGANO YASUHIKO）
国立民族学博物館・民族文化研究部・教授
研究者番号：50142013

(2)研究分担者
菊澤 律子（KIKUSAWA RITSUKO）
国立民族学博物館・先端人類科学研究部・准教授
研究者番号：90272616
西尾 哲夫（NISHIO TETSUO）
国立民族学博物館・民族文化研究部・教授
研究者番号：90221473

(3)連携研究者
武内 紹人（TAKEUCHI TSUGUHITO）
神戸市外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：10171612
池田 巧(IKEDA TAKUMI)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：90259250

高橋　慶治（TAKAHASHI YOSHIHARU）
愛知県立外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：20252405
立川　武蔵(TACHIKAWA MUSASHI)
愛知学院大学・文学部・教授
研究者番号：00022369
白井　聡子（SHIRAI SATOKO）
名古屋工業大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：70372555
本田　伊早夫（HONDA ISAO）
名古屋短期大学・英語コミュニケーション学科・教授
研究者番号：10269681
桐生　和幸（KIRYU KAZUYUKI）
美作大学・生活科学部・准教授
研究者番号：30310824

(4)研究協力者
R. LaPolla（LAPOLLA RANDY）
La Trobe 大学・言語学部・教授
M. Prins（PRINS MARIELLE）
西南民族大学・講師
戴慶厦（DAI QINGXIA）
中央民族大学・教授
G. Jacques（JACQUES GUILLAUME）
パリ第５大学・准教授
才譲太（TSERING THAR）
中国藏学研究中心・教授
S. Karmay（KARMAY SAMTEN）
フランス CNRS・教授
M. Turin（TURIN MARK）
Cornell 大学・人類学部・研究員
鈴木　博之（SUZUKI HIROYUKI）
日本学術振興会・特別研究員
津曲　真一（TSUMAGARI SHIN’ICHI）
日本学術振興会・特別研究員